

道都の120年を見続けて



時計台



豊平館



清華亭

である。

時計塔は最初からつけられていたが、建物完成の1年後、ボストンのハワード社から取りよせた自鳴鐘付き大時計が、いざ到着してみると塔が小さすぎて建て直したというエピソードが記録されている。以来120年以上にわたって時を告げ、時鐘の音を響かせ続けたのは奇跡に近く、その陰には営々と時計の保守管理に尽くしてきた井上時計店主親子二代の奉仕が秘められていることを忘れてはならない。

豊平館は、時計台に比べて一般的な観光人気では及ばないが、普段着とは違う、少し晴れがましい建物として親しまれてきた。建築的な評価でも高い点がつけられている。

開拓使官営のホテルとして1880（明治13）年に建築完成、造園などの仕上げが続いて翌年オープンした。実際は明治天皇の東北北海道巡幸での行在所にあてて目的が重なって、開拓使の総力を注ぎこんで建てられ、14年にわたる事業を代表する記念建築となった。ホテルとしても日本のホテル史上最初期のものに数えられる。

コリント・オーダーの円柱を立てた華やかな半円形ポーチには、貴顕の馬車が乗りつけ、二階のバンケットティング・ルームは舞踏会でも聞く構想が伺える。一階には食堂やビリヤード・ルームがあり、客室は居間と寝室セットのスイートが10組

開拓使は1869（明治2）年、明治政府（太政官）直属の機関として設けられ、1882（明治15）年まで北海道、樺太の開拓事業にあたった。札幌には開拓使の手になる建築が10棟近く遺されている。西欧文明の移植による近代国家建設をめざしたこの時代の歴史を今に伝える建築群である。

時計台は1878（明治11）年札幌農学校の演武場として建てられた。札幌農学校はW・S・クラーク博士を教頭にむかえて、1876（明治9）年に開校した。開校当初は小規模な学校で、キャンパスの位置が今の時計台を含む一角であった。開校時には北側に外人教師館を改装した講堂と南

側に寄宿舎があるだけで、二棟の間が大きく空いていた。中央講堂を建てる予定で、あれこれ計画が練られたのだが、結局下階は博物館展示室など、二階に大きなホールをもつ演武場が実現した。演武（ドリル）というのは、クラーク博士の故国、アメリカ合衆国の州立大学で当時行われていた軍事訓練プログラムのことで、体育実技と大講堂を兼用するホールであった。まだ市民会館などなかった時代のこと、この演武場は一般市民の講演会や音楽会などに広く開放されていた。

1903（明治36）年、農学校が現在の北大キャンパス地に移転したとき、演武場が取り壊しをまぬがれたのは市民に深く根付いていたことも一因